長誓寺あれこれ

熊澤　良嗣 調

歴史

長誓寺について『一宮市史下巻』に、「市内長専町は旧字名では長専及び東長専と称していたが、この地に南接せる森本（丹羽郡丹陽村大字）地内は字長誓寺という。もとこの地に名の如き寺があったが、葉栗郡浅井町大字東浅井に移転し、真宗太谷派として現存している」と書かれている。移転した時期については、明応年間（1492-1501）以前と推測している。

また『浅井町史』には、「往古は天台宗であったが、応永３年（1396）３月僧善栄、真宗に改宗して堂宇を修造し､その折り当村神明社内にあった阿弥陀仏を移して本尊とした。１５世紀半ば文正・応仁の頃、本願寺第８世蓮如上人が尾張・三河を巡錫して当寺に逗留せられ.... 以来、代々門跡巡錫の際は当寺に逗留される慣例となった.... 因みに当寺はもと一宮市内印田・森本・馬見塚の中央にあって、今尚その地に長専の字名があり、その地方に多数の檀徒がある」と書かれている。（傍点、筆者）

明治初年当時の字名図で確認してみると、確かに今の一宮市相生２丁目あたりに「長専」・「長専寺」・「長仙寺」の字名が見られる。

長誓寺のシダレサクラ

長誓寺というと何と言っても枝垂れ桜が有名である。一宮市の指定文化財になっており花の時期になると毎年ニュースに登場する。見学者が多いので、写真を撮るには早朝に出かけるのが良いだろう。本堂前にある樹齢 250 年の枝垂れの満開は見事である。

なお、山門左手のカイヅカイブキも文化財に指定されている。桜のような艶やかさはな

いが、樹齢 300 年を越え樹高 20 メートルにも達する大木は大変に珍しい。

長誓寺の本堂

長誓寺の本堂は愛知県の指定文化財である。桜の大木に遮られていて建物全体を一目で見ることは難しいが、寺院として造りがどこか違うことに気づく。理由は、この建物は移築されたもので、本来は寺院として造られたものではないからである。

長誓寺の本堂は、名古屋城三の丸にあった、尾張藩の年寄役渡辺半蔵家上屋敷の書院を移築したものである。廃藩置県となった明治の初め、初老記念にこの書院を６世森林平が買い受け、建替えを予定していた長誓寺に寄付したと言われている。

書院の解体は明治５年（1872）に始まり、城下の堀川から木曽川を経由して、いま浅井と川島を結ぶ河田橋の辺りにあった「河田（こうだ）の渡し」まで送られた。ここで陸揚げし長誓寺まで運ばれた。移築が完了したのは明治７年であった。本堂の鬼瓦や端飾り瓦に見られる「三つ星に一文字」の紋は渡辺家由来のものである。

初代渡辺半蔵は譜代の三河武士で、槍の名人だったことから「槍の半蔵」と綽名（あだな）されていた。旗本だった半蔵は、家康の９男徳川義直が初代の尾張藩主に決定すると、家康から直々に尾張藩付家老を命じられた。その家老職（年寄役）は明治に至るまで子孫によって引き継がれた。

相撲の碑

長誓寺参道の入口に相撲の碑がいくつか建っている。当地と江戸相撲との深い関係を物語る貴重な文化財である。一番大きな碑の表面には「東京力士霊魂之碑 横綱大関 常陸山謹書」と書かれている。つまり、相撲への復帰が叶わず、当地で亡くなった力士達を慰霊

する碑である。建立者は森医院の世話になった数多くの力士達だが、出世頭の常陸山の名前が発起人代表として刻まれているのである。亡くなった力士の弔いは長誓寺でおこなわれたのだろう。長誓寺の過去帳に名前が記されているという。

森林平は熱狂的な相撲好きであったため、来院する力士達の世話を無料でおこなった。力士は全国から押し寄せ、怪我が治るまで屋敷内の宿泊所に逗留して世話になった。

患者は、南は九州から北は北海道、台湾、樺太、朝鮮、満州からもやってきた。新患者数が千人を超えると、職員慰労を兼ねて７世林平は祝いの会を開いた。昭和８年まで森医院の門前に帳場があり、数十台の人力車が一宮駅と浅井の間を結んでいた。

屋敷内には土俵が造られていた。力士は治療の傍ら稽古もするからである。そのついでに、地元の素人力士が相手をしてもらうこともあった。また、屋敷内には薬師如来が祀られ、縁日には力士の名入り提灯が参道を飾った。出店が立ち、寄合相撲が開催された。名古屋場所などなかった時代であるから大変な賑わいようであった。

正月に森家は７５歳以上の地元の人を招いて敬老会を開いた。その折り、「祝高齢者順位番付」を作って出席者に配った。浅井町を南方（みなみ）と北方（きた）に分け、それぞれについて横綱・大関・関脇・小結に選ばれた高齢者の名前が印刷されていた。

狂歌（狂俳）

通り過ぎてしまう人が多いだろうが、長誓寺本堂裏の道端に「うら枯れや　我は帰らぬ旅の人」の句碑がある。作者はそこに書かれているが、東京相撲の呼出しだった面山恒吉（俳号は静軒東谿）という人である。脊椎を痛め明治２０年に森医院にやってきた恒吉は、その後浅井に留まり、余技として心得のあった狂俳の師匠となった。長誓寺で３日連続の狂歌会を催したこともあったという。この句碑は弟子達が建てたものである。

東谿の影響かどうか分からないが、明治から大正にかけて浅井・丹羽・一宮方面には狂俳を詠む人が多くいた。林平さんも亀斉という俳号を持っていたようだ。別の作者のものだが、浅井町尾関の寿福寺にも狂俳の碑が建てられているという。

最後に、狂俳（狂歌）で思い出したことを付記する。

最近まで市役所市長室前庭にあったが、新庁舎ができて元豊島図書館（博物館資料庫）に移された道標がある。「酒井亀丸道標」といわれるもので、文政時代（1818-1830）に一宮の狂歌師亀丸が、神明津（いま桜３丁目）の浅井道角に建てたという。

（表面）　右 犬山道 是より四里

（左　）　左 あさ井道 是より壱里

（右　）　別れ道 酒うる家をたつぬれハ やハり左と かきし立石　　亀丸

＜参考文献：一宮市浅井町史、浅井風物考、浅井古今百話、一宮石の華＞